

続・姫路に残るもうひとつの城下町

— 小笠原氏 1 万石の陣屋町・安志 —

「城踏」No.23で建部氏 1 万石の陣屋町、林田を紹介したことがあります。その後、姫路市も平成の大合併ののっかって周辺の町村を併呑することになり、またひとつ陣屋町が市域に含まれることになりました。それが本号で紹介する安志(あんじ)です。

宍粟(しろう)郡の安富(やすとみ)町は姫路市と合併する道を選びました。この町自体、「安師村(あなしむら)」と「富栖村(とみすむら)」が合併してできた町でした。安志は安師村における中心地で、町役場も安志に置かれました。

享保元(1716)年、豊前中津の小笠原家が無嗣断絶になったものの、祖先の功により長興(ながおき)が宍粟郡内で 1 万石を与えられ、安志に居所を置いたのが始まりです。小笠原家といえば、豊前小倉のそれが有名ですが、家系からすると中津の小笠原家が嫡系に当たります。1 万石に減少したとはいえ、家の存続が認められたのは、そのあたりが斟酌されたのでしょう。

さて、安志陣屋の中核部分は現在、市立安富中学校の敷地となり、陣屋施設の痕跡は認めることは困難です。写真 1 のように、陣屋の建物の一部が市内に移築され現存しています。

数少ない陣屋を描いた史料では図 1 のようなものがあります。これをみると、安志陣屋がどのような平面形態をしており、その周囲に武家屋敷がどのように展開していたかがわかります。こうした史料を検討した上で陣屋跡を歩いてみると、わずかに遺構を認めることができます。例えば、写真 2 は民家と丘陵端の崖の間に残る南北に細長い地割です。これは、陣屋の南にあった馬場の跡です。

安志陣屋は、弥ノ山から延びる丘陵上に築られました。町はその低位にある自然堤防上にあり、ちょうど、姫路から林田を経由して山崎へ抜ける道と前之庄から山崎断層にそって山崎へ向う道の交点に位置しています。とはいうものの、大正 14(1925)年に描かれた廃藩当時の地図(図 2)をみれば明らかなように、集落の規模としては小さ



写真 1 真光寺 (姫路市安富町長野) に残る御殿の表門



写真 2 馬場跡

なものでした。それは、もともと安志谷とも呼ばれた村々のまとまりがあり、その中心的地位にあった安志村が、前述の交通上の特性から「町並」になったという程度だからで、陣屋が置かれた時期が新しいのと、山崎や林田とそれほど距離的に隔絶していないこと、後背地(安志谷)の広がり大きくないことも一因かもしれません。

さて、図 1 をもとに陣屋をみてみましょう。前述のように陣屋は丘陵上にあるため、南に町を見下ろす格好になっており、選地としては良好です。南から東にかけては丘陵の崖を外郭線としています。中国山地から続くなだらかな傾斜地形は陣屋の北から西になります。西から北側は堀を掘ったりせず、土塀によって区画されている程度で、南の大手門では竹矢来を廻らしていました。陣屋の背後のみ、樹林としています。先日焼失した光久寺は陣屋の北西に位置しています。

街路は大手門から御殿前を通り、北門へ抜ける南北の筋(広小路筋)がメインで、直線ではなく、途中で 3 度クランクしています。東西の通りは広小路筋に直交するかたちで、ほぼ碁盤目状になっています。

大手門を入れて広小路筋を北進すると、家老屋敷の土塀にぶつかります。ここに犬甘家と小笠原家がありました。ここを現在、中国縦貫自動車道が貫いています。御殿の表門の前には筋に平行して土塀が廻らされ、枡形のようになっていました。これは馬場の可能性があります。写真 2 の馬場は郭外にあるため(一旦、東門を出ないと行かない)、藩士が訓練に使用し、馬見所が描かれているのでときたま藩主がお出ましになり観閲でもしたのでしょうか。また、図 1 では土塀が白と赤っぽい色で着色されているところがあります。白い土塀は御殿とその周囲および大手門のところ、赤は武家屋敷地となっていることがわかります。格の違いや施設の性格を、土塀の上塗り、すなわち見た目で見分けていたのかもしれない。



写真 3 武家屋敷地に残っていた石垣 (現存せず)

家老犬甘氏は、小笠原家が存続になったものの、無城主格であることを恥とっており、さかんに城主格への上昇を働きかけました。しかし結局のところ、「安志城」となることはなかったのです。

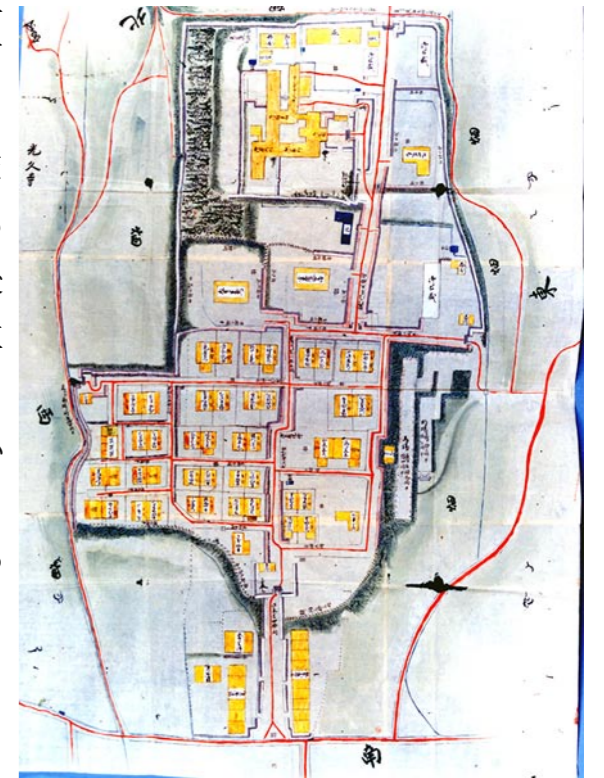


図 1 安志陣屋図

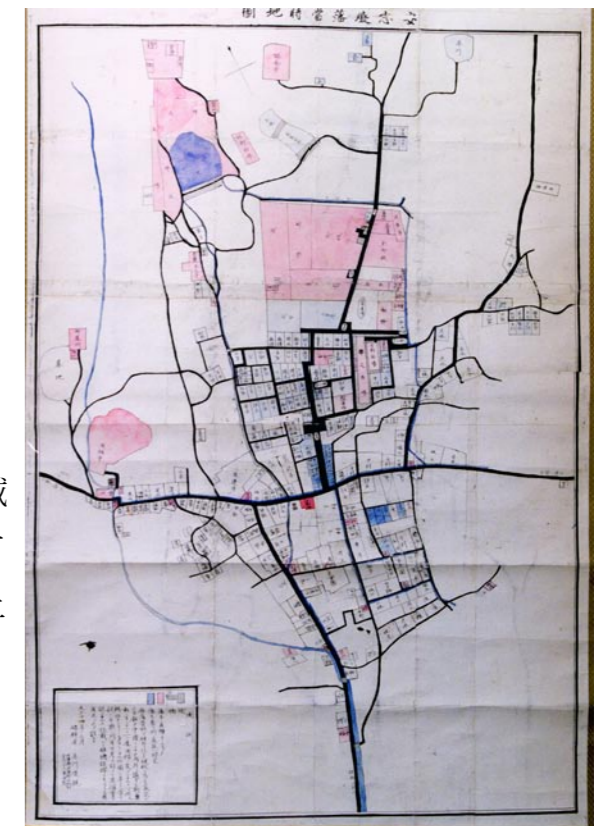


図 2